学問で人とつながる場

板橋拓己（東京大学）

わたしが世界政治研究会で初めて報告したのは2007年 2 月10日のこと。記録によれば、第128回目の研究会だったようだ。当時わたしは北海道大学大学院法学研究科博士後期課程に所属して 3 年目であった。この研究会のとても良いところであり、また同時に――とくに若手にとって――最初のハードルは、コメンテーターを自分で見つけてくることだろう。北大で院生をやっていると、道外の研究者と知り合う機会はとても少ない。そこで指導教員を同じくする大学院の先輩である川嶋周一さん（明治大学）に相談すると、明治学院大学の葛谷彩さんが良いのではないかと提案された。葛谷さんの著作はもちろん読んでいたけれども、お会いしたことはなく躊躇したが、思い切って依頼のメールを出したところ、葛谷さんはご快諾くださった。このときをきっかけに、葛谷さんは、わたしにとって最もお世話になった先生のひとりとなり、また現在まで続く不可欠な研究仲間となった。こうした出会いは世界政治研究会の魅力のひとつだろう。

また、世界政治研究会の特徴は、何といっても議論の濃さである。報告時間が60分で、討論に 2 時間近くあてられている。たとえば大きな学会だとせいぜい報告は25分程度、質問の数は片手で足りるくらいだろう。しかも、だいたいは出来上がったペーパーに基づいた報告である。逆に世界政治研究会では、基本的には報告者が研究途上のものを 1 時間かけてさらけ出し、参加者みんなで揉んでいくのだ。わたしの場合、D3になってもなかなか博士論文の枠組みが定まらないなか、「近代ドイツにおけるナショナリズムと「中欧」の問題」と題して、これまでの研究から、どのくらい大きなことが言えるかをぶつけてみた。学会報告となるとどうしてもディフェンシブになりがちだが、世界政治研究会だとそんな必要もない。また、質疑応答もかなり率直なやり取りができる。こうした雰囲気の研究会は、実はなかなか少ないのだと、あとになってわかった。

2010年 4 月に成蹊大学法学部の助教に就任して、東京に引っ越した。わたしは学部から数えると13年間北大に所属し、東京に住むのも初めてだった。そんな（地）縁に乏しい若手研究者にとって、世界政治研究会は本当にありがたい場であった。また、博士論文執筆中には狭くなりがちであった視野を広げるためにも、恰好の研究会であった。記録を眺めてみると、2011年から15年ころは、かなりの頻度で出席していたように思う。そこでは実にいろいろな研究者の方に出会ったし、また吉田真也さんをはじめ編集者の方がたにも出会った（やがて吉田さんには単著と編著を担当していただくことになる）。自分は見知らぬ人とコミュニケーションをとるのは苦手な方なのだが、ひとつの研究会をともにすると、自然と話題もできる。ずいぶんと助けられたなあと思う。

残念ながら、御多分に洩れず自分も忙しくなってしまい、なかなか参加できる時間を確保するのが難しくなってしまった。それでも、何か自分にできることがあればお手伝いできればと思っている。言うまでもなく、これからは出身大学の枠を超えて、若手研究者の養成を考えていく必要がある。世界政治研究会は、そういった場のモデルにもなっているように思う。